

Reply from the Author

急性発症の longitudinally extensive spinal cord lesion を呈した 転移性脊髄髄内腫瘍

大中 洋平* 中島 雅士 河村 満

Intramedullary spinal cord metastasis presenting with acute onset longitudinally extensive spinal cord lesion

Youhei Ohnaka, M.D., Masashi Nakajima, M.D. and Mitsuru Kawamura, M.D.

Department of Neurology, Showa University School of Medicine

(臨床神経 2011;51:434)

拝啓

われわれの短報「急性発症の longitudinally extensive spinal cord lesion を呈した転移性脊髄髄内腫瘍」に関する亀山氏の御指摘に回答いたします。

貴重な御意見ありがとうございます。

さて報告症例¹⁾のMRI画像に示されたLESCLは脊髄鉛筆状軟化ではないかという御指摘ですが、再度この症例の臨床経過および画像所見を過去の文献をふまえて詳細に検討いたしました。御指摘の通りこの症例のLESCLが脊髄鉛筆状軟化にいたる可能性は否定できません。しかし、脊髄鉛筆状軟化の既報告例では、背部痛や一過性の障害レベルの上行が特徴のように思えますが、この症例ではその臨床所見は明らかではありませんでした。また、この症例のLESCLは横断性であり、脊髄中心部、とくに脊髄後索深部ないし後角に限局するという脊髄鉛筆状軟化とは若干ことになっているものと思われま

す。脊髄鉛筆状軟化の成立は、脊髄内または全身性の循環障害²⁾、脊髄の局所性圧迫による壊死組織の上下方向への侵入³⁾、または剖検時の人工産物で説明されていますが、脊髄の圧迫性または占拠性病変にもなって長軸方向に伸びる浮腫

は、脊髄鉛筆状軟化よりも普遍的な現象です。さらに、この症例のLESCLは可逆性であり、その基盤にある病理学的変化は、軟化すなわち壊死性変化ではなく、血管原性浮腫であろうと推測します。その成立には腰膨大部の転移性脊髄髄内腫瘍にともなう脊柱管内の循環障害が関与していたものと考えま

敬具

文 献

- 1) 大中洋平, 中島雅士, 加藤大貴ら. 急性発症の longitudinally extensive spinal cord lesion を呈した転移性脊髄髄内腫瘍. 臨床神経学 2010;50:725-727.
- 2) Hirose G, Shimazaki K, Takado M, et al. Intramedullary spinal cord metastasis associated with pencil-shaped softening of the spinal cord. J Neurosurg 1980;52:718-721.
- 3) Hashizume Y, Iijima S, Kishimoto H, et al. Pencil-shaped softening of the spinal cord. pathologic study in 12 autopsy cases. Acta Neuropathol 1983;16:1219-1224.

*Corresponding author: 昭和大学医学部内科学講座神経内科学部門 [〒142-8666 東京都品川区旗の台1-5-8]
昭和大学医学部内科学講座神経内科学部門
(受付日: 2011年1月19日)